

## 【社会思想史学会セッション報告】

太田仁樹

セッション名：マルクス主義の展開

論題：鈴木富久『グラムシ「獄中ノート」の学的構造』をめぐって

報告者：鈴木富久（桃山学院大学）

コメンテーター：川上恵江（元熊本大学）

世話人：太田仁樹（岡山大学）

日時：2010年10月24日

場所：神奈川大学横浜キャンパス23号館301教室

参加人数：10人

まず、コメンテーター（川上恵江）より「グラムシ研究史における鈴木著の独自性と意義」について問題提起があった。（25分）

鈴木著は『ノート』の全体構造をはじめて体系的に解明し、その全容を主題化したという意味で画期的な意義を持つ。これは、故竹村英輔氏の問題提起を引き継ぎ発展させたものであり、国内外を問わず、従来の研究にはなし得なかった仕事である。

従来の非体系的な『ノート』像として片桐薫氏の説があるが、それに対しては、体系的な世界観としての「実践の哲学」を示した。

竹村英輔氏の二重構造仮説（個別具体的な諸考察と抽象的理論的諸考察）を「理論と歴史の二重構造」として捉え直し、両者を結ぶ論理（方法論）として3次元的方法論を提起している。これによって、「歴史主義の弱さ」を克服した。

続いて、報告者（鈴木富久）より「グラムシのマルクス継承と再構成」について報告がなされた。（45分）

著書『グラムシ「獄中ノート」の学的構造』は「『ノート』体系」・その構造を初めて問題化したものである。グラムシのマルクス観の核心は、哲学・政治・歴史の同一性、絶対的歴史主義＝哲学的人間主義であり、「実践の哲学」とその諸科学である。このように解釈する場合の中心的典拠は、「フォイエールバッハに関するテーゼ」および「経済学批判序言定式」である。

社会変革＝新しい歴史創造は、人びとの「実践的諸活動総体」を変革することとして捉えられ、「実践の転覆」と表現される。「活動的關係」は、哲学的原理としては「実践」、政治・歴史研究の次元では「ヘゲモニー」となる。「実践の哲学」辞退が、固有「哲学」を一般的方法論（弁証法＝認識論）とする諸科学を包含した自己包括的複合構造において成立するものである。

支配階級は指導階級でもなければならず、全社会に対する住民からの恒常的同意を獲得し、「同調行動」を生み出すような指導機能を果たさねばならぬ。このような指導-同意の相互的關係が「ヘゲモニー」であり、知的道徳的力量の保有を含意したものである。

従来のマルクス主義では、階級史観における「個人」の概念的 position 付けが不明確であった。グラムシは両者を異なる次元だと捉え、個人の意識と行動は、客観的な「経済的（階級的）位置」に決定されないとする。ここに知識人概念成立の前提がある。

国家の現出形態は二つ、「政治社会」（官吏統治）と「市民社会」（自己統治）とである。政治社会は国家の「外殻」、市民社会は国家の「倫理的内容」を形成する。グラムシの「市民社会」論はヘーゲル「市民社会」（職業団体）論の現代的概念構成と言える。

一階級は国家となって「歴史となる」。そこに成立するのが「歴史的ブロック」（構造と上部構造との一体性）である。特定の（指導階級のヘゲモニーを通じて普及された）イデオロギーを地盤として「構造」の意味転換がおこっており、それが人びとに共有されている。このようなヘゲモニーと構造観の変革は「知識人と民衆の社会的ブロック」の形成から創造される。「社会的ブロック」は知識人と民衆の相互的な「活動的關係」において成立する。

この後、フロアーから以下のような質疑がなされ応答があった。（約60分）

黒滝正昭（元宮城学院女子大学）

- ・ 獄中ノートの中での、20世紀のマルクス主義者に対する捉え方が興味深い、具体的な指摘はどのようなものか？
- ・ 第2インターナショナルのマルクス主義者（カウツキー、ヒルファディング、ローザ・ルクセンブルク）に対する言及はあるか？

橋本直樹（鹿児島大学）

- ・ グラムシが言及しているマルクス等の版本は何か？
- ・ グラムシにとってラブリオーラの意義はどう考えるべきか？
- ・ 「階級闘争史観」（ギゾー、ティエール等）についての知識はあったのか？
- ・ レーニンをどう評価しているのか？
- ・ 「歴史的ブロック」の「ブロック」はどのようなイメージで捉えるべきか？

秋元由裕（北海道大学大学院生）

- ・ プロレタリアートの自己意識はグラムシではどのように考えられているか？

宮下武美（東京グラムシ会）

- ・ グラムシには「プロレタリアート」という語は少ないのでは？
- ・ レーニンの労働組合論との関わりが重要ではないか？
- ・ マルクス哲学とグラムシの哲学との関連をどう考えるべきか？

(50字×67行)